

和田昌親 著 『ブラジルの流儀 ——なぜ「21世紀の主演」なのか——』

発行元◎中央公論新社
発行年月◎2011年2月
総ページ数◎252ページ
価 格◎861円(税込)



ブラジル滞在通算10年ほどになるが、本書はブラジル生活における日常の疑問(もやもや)を払拭してくれる待望の「バイブル」であり、常に手元に置いて繰り返し熟読している。本書の特徴は、著者が比較文化学の教授ではなく、ブラジル特派員を経験した記者であり、全編を通じて「なぜ? なぜ?」と問いかけ、1問ずつ丁寧に答えていく形式で、一般向けに読みやすく構成されていることである。著者のブラジル特派員としてのカバーエリアは中南米全域と広範であり、その後の国際派の経歴もあり、本書にはブラジルと他地域との比較が随所にみられ、多角的かつ相対的な視点でブラジルを観察しているのも興味深い。またその中で日本とブラジルとの歴史や経済関係など、ブラジルに接点をもつ日本人が最低限押さえておくべきポイントが絶妙にちりばめられている。本書はブラジルに関心がある日本人にはもちろんのこと、ブラジルで生活している日本人にとっては、その生活を正に「10倍楽しくする本」といえよう。余談になるが、10年以上前に、

ある米国人ジャーナリストが『How to be a Carioca (リオっ子になるためには)』という本を出版して話題になったが、内容はかなり柔らかいものであり、明るくずるがしてイリオっ子をイラスト付きで描写した一種のギャグ本にすぎなかった。このようなブラジルを滑稽視した本はいくつか存在するが、本書のようにブラジルの「なぜ?」を広範かつ緩急(固い話から柔らかい話まで)をつけて分析した本は珍しく貴重だ。

本書において恐らく著者が最も訴えたかったことは、最後の項目の「なぜブラジルは日本を救う存在になりうるのか」であり、その答えは「食糧安保の同盟国となりうるから」。現状、日本の商社はブラジルでの農業投資や食料物流確保に注力し始めているが、これに両国政府を加えた官民合同での食料確保体制が大いに期待されているところであり、重要な問題提起で締めくくっている。

私も著者同様にブラジルをこよなく愛し、自他共に認める「ブラキチ」であるが、本書はその情熱のみならず、著者の記者経験を通

じた鋭い洞察力や豊富な知識を背景に、ブラジルに対する愛情を込めた助言や指摘がなされている。ブラジルにおいては、会議や商談の場でまずはサッカー等の身近な話題から入るのが一種のマナーであるが、私は最近、本書の目次からいくつかタイトルをピックアップし、日本人(外国人)からみてブラジルのこんな点に関心や驚きがあるということを伝え、相手から新鮮さをもって喜ばれ会議も円滑に進む。もし本書がいつの日かポルトガル語に翻訳され、多くのブラジル人に読まれれば、日本とブラジルの距離をいっそう縮める有効なツールとなると信じてやまない。

著者は本書の冒頭にて、「日本にとってブラジルは救世主」と記しているが、本書は日本にとってますます重要な経済パートナーとなるブラジルを理解するうえでの正に「救世主」であるといえよう。

(国際協力銀行
リオデジャネイロ首席駐在員
細島孝宏)